

シリーズ隠れた建築紹介 ～長町研修塾・匠心庵～

金沢市の武家屋敷は誰もが訪れたことのある観光地である。そこに長町研修塾たるものが近頃、お目見え(完成)した。金沢職人大学校の研修生たちが学んだ技術を生かした総合学習として完成させたものである。周辺環境の景観に合わせて旧家の建物を修復し、新たに茶室・匠心庵(しょうしんあん)と庭園がつけられた。旧家は藩政期末から明治初期約130年前に建てられたものであり、増築・改築を重ね、金沢市が平成9年に買い取ったものである。一部を取り壊し、約二百平方メートルの建物に外装工事を施した。耐雪のため軒先には強度を持たせるなど職人の技が駆使されている。内部は天井が高く、能や邦楽ができるようになっており、伝統芸能の練習や茶席などの使用に限り、一般に貸し出しを行っている。また決して広いとは言えない庭園(山景園)には、金沢の四季折々の変化を見せる医王山の山並みを薬師如来にそえ、諸仏を戸室山、卯辰山、野田山、高尾山、キゴ山、庄司峰、国見山、倉ヶ岳の山々になぞられた自然石が配されており、茶室からこれらの山並みを眺め、風情を楽しむことができる。古い現存する民家を再生、修景し、現在に蘇ったことは、すばらしいことである。引き継がれた匠技、時の流れを感じる部材から、力強さとたえようのない情緒がもし出される。武家屋敷を散策するときには、ぜひ立ち寄ってみたい空間である。

休館日：毎週火曜日、休日の翌日  
 使用時間帯：午前9時～12時、午後1時～4時  
 当塾の使用申し込みは金沢職人大学校まで  
 (使用予定日の7日前から1ヶ月前)。  
 連絡先：金沢職人大学校  
 〒920-0046 金沢市大和町1-1  
 電話：076-265-8311 Fax：076-265-6301  
 ー金沢大学 池本 敏和



が見えてきたように思います。そして、ふとしたことから「人間の自然に対する行為はすべて、人としての『豊かさ』を求めているから

なのでは？」ということを感じました。  
 私達は森を切り開き、道を造り、河をせき止めるなど、自然を削って様々な「豊かさ」を手に入れてきました。自然に身を置いて得られる、何かしらの心の豊かさもその一つでしょう。でも、手に入れた豊かさの中で、心のどこかも削られているような気がしてなりません。  
 先日、この特別講義の締めくくりとして植林を行いました。自分の手で土を掘り、苗木を植えたとき、削れた心が少しではあるけれど癒された気がするとともに、この植林も人間の自分勝手な行為なのかな…と考えてしまいました。  
 自然と人間との関係、このテーマは今の私にはとてつもなく大きなものであり、自分の存在の小ささを改めて思いました。しかし、近い将来、確実に受け止めなくてはいけないテーマでもあり、その時自分に何が出来るか、それを考えるためにもまだまだ学ぶことは多いと感じています。

ー高岡短期大学 産業工芸学科 産業デザイン専攻  
 2年 土肥 匡晴

■「北陸支部大会の報告」  
 1999年の北陸支部大会は暑さまっさかりの7/30・31に富山で行われました。当日は立山連峰が青空の下にはっきり浮かび上がる好天(猛暑でした…)で発表の皆さんからも熱気がでていますから、冷房が効いている会場が好評でした。これも県内の大学に建築学科がない富山の良さでしょうか!? 富山支所は支部大会を行うのが今回が2回目で私自身は5年前を経験していなかったので大会当日まで本当に大丈夫かなあと心配でした。しかしそんな心配は余計なお世話で会場の設営、シンポジウム、見学会、懇親会みな合格点をいただけるのではないかと思います。異論のある方は5年後の為に不合格な点をご指摘下さい。個人的には大会がきっかけで新しい出会いがあったり、社会人になっても研究を続けておられる方を目のあたりにして私も勉強しなければ!! と思ったり、記念シンポジウムではアメリカの住宅は完了検査を受けなくては電気・ガスといったライフラインが繋がらない事を知り驚いたりとても刺激を受けました。あとは実践ですかね。ははは…頑張ります。

ー北陸支部大会・総務担当 中川 陽子  
 (株)三四五建築研究所

北陸支部インフォメーション

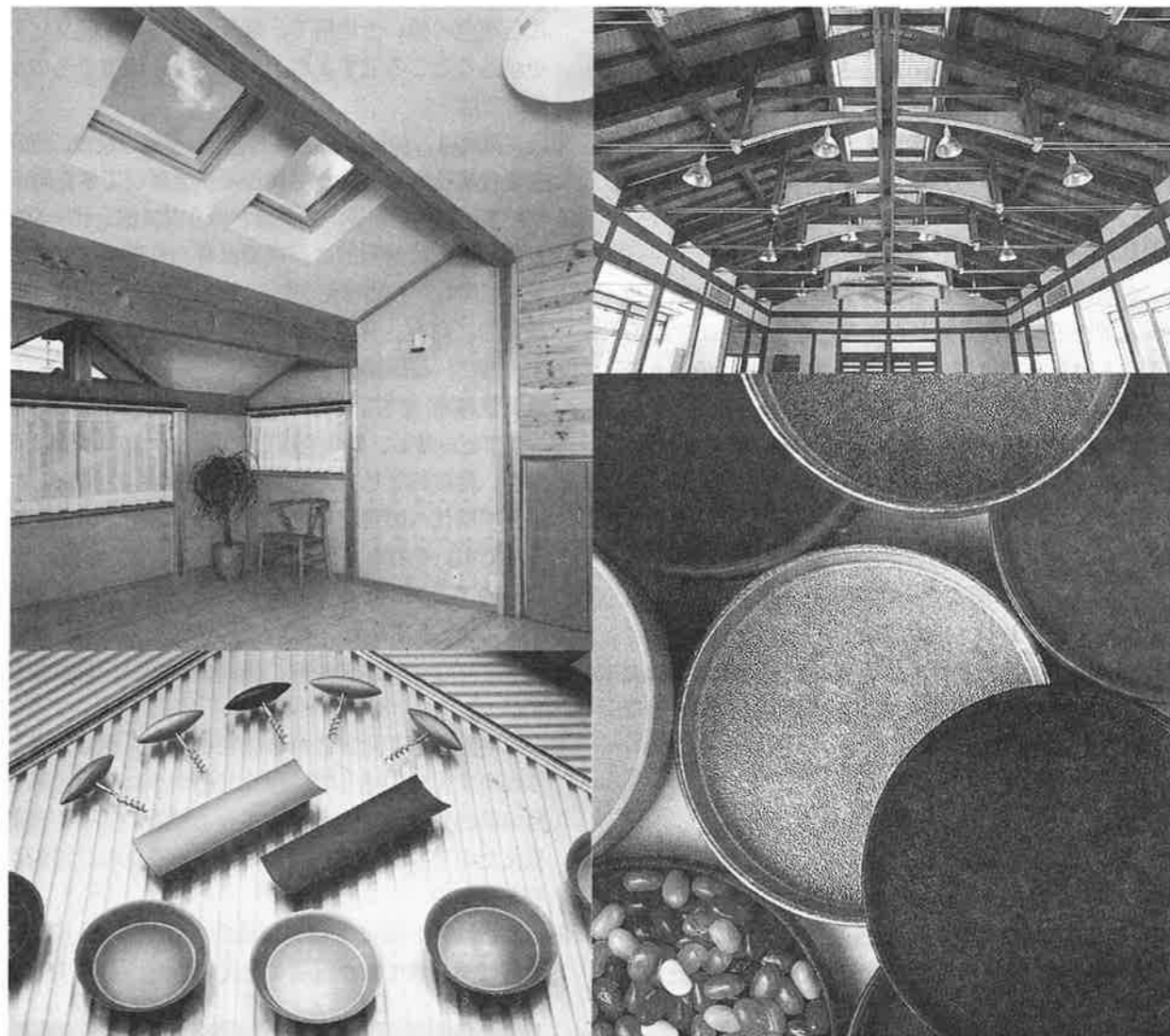
■「建築文化週間・立山山麓見学会」を終えて思うこと  
 (99.6.26.)  
 今回の見学会には、デザインを学ぶ学生として、学校の特別講義のテーマでもある「自然と人間の関係」に主眼をおいて参加させていただきました。砂防博物館やカキ工房、まんだら遊苑などで自分の眼で見聞きしたことを通じ、自然と人間の様々な関係

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第17号

発行日 1999年11月10日発行  
 発行 日本建築学会北陸支部広報部会  
 相田 幸一(新潟) 加藤 則子(富山)  
 長谷川兼一(長野) 池本 敏和(石川)  
 野嶋 慎二(福井) 石川浩一郎(福井)  
 事務局 室田 文男・瀬口さゆり  
 〒920-0863 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F  
 TEL&FAX 076-220-5566



特集  
 地域、伝統、風習



左上：内記悦子設計・住宅室内 (撮影/小杉善和)  
 左下：高岡市デザイン工芸センターオープニング記念展「ニュークラフト展」より  
 右下：職藝学院校舎内部架構 (学院パンフレットより)  
 右下：黒川雅之デザイン「Japonism」 (撮影/与儀達二)

支部ニュース「AH!」の第17号をお届けいたします。今回の座談会は「地域と伝統」のテーマのもとに富山支所のお世話でとりおこなわれました。

さて、広報部会の新しい試みのひとつとして、HP (<http://www.anc-d.fukui-u.ac.jp/~ishikawa/AIJ-hokuriku-shibu/koho-bukai.htm>)を開設いたしました。まだ、試行版ですが、第16号からの「AH!」、北陸支部の新着インフォメーションを閲覧することができます。特に、このインフォメーションのところで、支部の情報を迅速にお伝えしていく予定です。ご意見、ご助言いただければ幸いです。

## 地域と伝統

今回は「伝統へのこだわり・現状とこれから」がテーマです。

伝統の重み、守り育てていく道はあるのか、など思いの葛藤と本音を熱く語っていただきました。メンバーは、高岡デザイン工芸センター所長で高岡の伝統産業に携わってこられた末坂幸子さん、現代の生活を研究し富山の住宅を数多く設計しておられる内記悦子さん、富山国際職藝学院の理事長で木造建築の伝統技術を継承する教育に携わっておられる稲葉実さん、そして建築家でありプロダクトデザイナーである黒川雅之さんには、富山を外から客観的に見ていただき、この会のコーディネータをお願いしました。会場は、職藝学院の実験研究施設である、パーフェクトリサイクルハウスです。

### 地域の重み

黒川：自然に恵まれたこの富山の大地が富山の生活文化を育ててきていると、外から見るとそう思うのですが、稲葉さんは東京ではできないこの地ならではのことがされているようですね。富山の中でも里山である大山町に、大工の伝統技術を学び伝える学校をつくられた。

稲葉：建築の仲間達が皆何かを求めていた、喉の渇きを訴えていたんです。職藝学院をつくる際に、ここの家具製作マイスターである柿谷さんの生き様に影響を受けました。もう36年前に立山山麓の里山に移り住んで、冬はスキーをそれ以外は家具づくりをするというライフスタイル。大地に根づく生活実感が彼らにはあったんです。職藝学院も「テント1つから始めていいじゃないか！」と言われて。

黒川：ロマンですね。

稲葉：そう、ロマン。それとガマンも。(笑)

末坂：当時('67~'70年代前半)、アンチ体制派のヒッピーが既存の社会生活からの離脱を主張し、「自然にかえれ」と都市からカントリーへ逃避し、手作りのモノづくりを始める…、そんなムーブメントがありました。柿



職藝学院リサイクルハウスにて

谷さんはそのはしりで、当然、そこでの生活は従来の里山のライフスタイルではなく、都市生活者であった彼らの生活哲学の反映としてのライフスタイルが展開されたと思います。近年は、環境保全、農業振興の立場から里山を復活させようという動きはありますが…。

黒川：山の中に山小屋をつくって、というのではなくて、都会を山に持ち込むスタイルですね。そういえば私の友人でデザイナーの故倉俣史朗さんのまだ小さい息子さんか河口湖畔にあった私の別荘を見て、「山の中に山小屋風でないのがいい」とひとこと言っていったのを思い出しました。ところで末坂さん、県内でも高岡は特に伝統色の強い土地柄で、加賀百万石の人間文化の歴史があるところですよ。大地の力とは違うものがあるのでは？

末坂：高岡は、加賀藩二代藩主前田利家公の没後、経済性を優先する町人によって遅く生き延びてきた町人の町です。明治維新後、加賀藩という大スポンサーをなくした加賀とは対照的に、高岡は有力な問屋が加賀の名工を招聘し、技術移転を図り、高岡銅器・漆器の技術が飛躍的に向上、全国各地の市場開拓にも成功しています。殊に、高岡銅器は明治初年、ジャポネズリー(日本風骨董趣味)を切口として、日本の工芸水準の高さを世界にアピールし、外貨を稼いでいました。高岡商人の先見性、営業的なセンスには目を見張るものがあります。絶えず時代への目配りをして、センスを磨いてきているんです。それも高岡の伝統文化ではないでしょうか。自分のアイデンティティをどう表現するか…。要はソフィステートするセンスだと思います。近頃は、そのアクティブな気質が失われ、負の面ばかりが目につきますが…。

黒川：内記さんの設計される住宅を見て、東京にあるようなカチカチの感じではなくて穏やかな空間の感覚と目の前の具体的なことにきちっと対処していく姿勢が見えたのですが、富山で仕事をするこだわりは何かありますか？

内記：私は若い頃は富山の伝統的な住宅が嫌いでした。風習に縛られて家が重荷に見えました。それで家は住



柿谷さんも加わって



稲葉 実さん



内記 悦子さん



末坂 幸子さん



黒川 雅之さん

む人が主役なのだから伝統的な形から考えるのではなく、住む人の暮らしから発想しようという姿勢でやってきました。ただ、最近は古い民家のおおらかな骨組の空間にとっても魅せられるのです。それは形から風習が抜けてしまっているからではないかと思うんですが、それで今度はそうした伝統的な住宅が簡単に壊されていくのを見ると、ちょっと待ってと言いたくなるんですね。



架構を表す。内記悦子設計

### 伝統は足かせ？

末坂：私は高岡に生まれ、高岡で仕事をしておりませんが、若い頃は、この町のもつ重圧から逃れ、高岡的なもの全てを一掃したい衝動にかられていました。価値観と美意識のギャップ。とにかく町の重さを感じるんです。町のたたずまい、町に溢れる古いモノ、モノ、…、古い慣習が連綿と生きる日々の暮らし。

黒川：羽ばたけない歴史の重さ。高岡の持つ伝統は負のイメージが強いように思うのですが。

末坂：負が、拘束する何かがあるからこそ、飛び出していこうとする…。

黒川：どうしようもない親の元から、親に反発して飛び立つのでしょうか。満たされない想いが欲望を生んで我慢が生命力になる。伝統に縛られた我慢が浪漫を生んでいくのでしょうか。

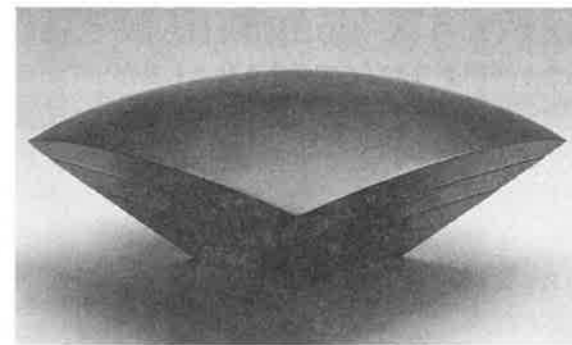
末坂：伝統的な揉縛から逃れ、フリーな表現をすることが如何に難しいかと言うことの一例ですが、ルーバーがありますね。かつて連子格子は採光の機能と共に、中から外が見え、外からは遮るという効果的な役目を果たす仕掛けでしたが、近頃、スタイリングだけの背景のないデザインが見られます。

内記：外国の人は日本の古い道具や帯を私達日本人が思いもつかないような使い方をしますね。とても斬新なインテリアを創っているのを見ますが、それは道具や帯の本来の意味にとらわれないから出来ることだと思うんです。高岡銅器は私にとっては無くて困るようなものではありませんが、富山県にとっては財産なのだと感じます。ただ大きな歴史の流れの中でそれだけにこだわっていくのはどうかと…違う視点でとらえることが必要ではないでしょうか。

末坂：消費者にとっては高岡でつくられたモノであろうと、ベトナム製であろうと、どうでもいいこと。問題なのはフィーリング、クオリティと価格なのです。人々は、自己の生活哲学の反映としてモノを求め、自らの生活哲学と波長を同じくするモノをフィーリングで感じ商品を購入しています。「今」を生きるスタンスが必要なのです。モノにまつわる歴史やストーリーは、今は通じなくなっています。

黒川：それでは高岡にとって伝統は足かせ？

末坂：足かせかもしれませんね。モノづくりにおける伝統というものは、「守」と「創」、守りながら創り出す側面と、創られながら守られるという二面性を有していると思います。高岡のモノづくりの在り方、生き方をデザインする事が求められているのですが、今は、生き



「漆の箱」黒川雅之デザイン (撮影/清水 昭)



高岡デザイン工芸センター  
オープニング記念展「ニュークラフト展」

の苦しみのまっただ中にあるというところです。

黒川：高岡は今、不況下で大変ですものね。

稲葉：伝統を今に繋げていこうとするクラフトコンペも、ここところの不況で流されてしまいそうです。高岡だけの狭い視野で見ているから。せっかく外からの目で、黒川さんにも見てもらっていたのに残念です。

### 伝統とは…

黒川：伝統って何？伝統と現代との関係は？単に博物館にしまい込むような物ではなくて現代との関わりを考えていくことが未来につながる。今、破綻か。爆弾を抱えていますね。

内記：中にいる当事者にとっては伝統ってわかりすぎていて意識しないもの。今を創りだせるかどうかはそのとらえ方次第ではないでしょうか。そういう魅力とか可能性は秘めているでしょう。高岡だけで解決しようとするより活性化は他からやってくるように思いますし、高岡の伝統が本当に底力を持っているとしたらほってはおかれないうじゃないでしょうか。

末坂：表現者は過去の手法を踏襲するだけでは意味がない。精神的な活動に裏うちされた自己の反映としてのモノづくり…それが今を生きるクリエイターの責務だと思います。職藝学院の学生は伝統技術を身につけて、これから何を創りあげていくのでしょうか。

稲葉：今を生きる学生達は、確かに我々にも警告を与えてくれている。彼らは純粋に何を求めているのだろうか。到達できなくて学生も我々ももがいているんです。自分を肯定しすぎるのも否定しすぎるのも良くない。海外の建築家やクリエイター達との交流で感じたことです。個人ではなくて学校として、**伝統をリフレッシュできる可能性があると思っています。匠の技のストックとリフレッシュ。**

内記：伝統あるものは価値が確立して極めてしまっていますよね。それは別の見方をすると閉塞感があるとい

うことになると思います。若者が生き生きするのは自分達にも何か出来る可能性を感じる時ではないでしょうか。今を生きるその時代に貢献できる何かを見つけるのはワクワクするくらいに楽しいことですね。新しい何かを作るには伝統を大切にしながらも逆に伝統にとらわれないことがとても大事なことだと思います。

黒川：そういう意味では意固地であっては駄目でしょうね。伝統を創造的に捉える必要があるんでしょう。ほんとは伝統とは「人間的な、大切な負の感覚」なんだと思うんです。

どうしても出てしまう日本的なものとは、どうしても遺伝子の中にある拒否できないもの、という感覚が必要なんではないでしょうか。創造的に生きるその中で「愛おしく受け止めるものとしての伝統。」僕にはそんな感覚があります。

稲葉：職人の世界で先人が言ったことに、「道具の始末・仕事の始末・身の始末」というのがあって、このなかで、「身の始末」というのは、後継者を育てるといふことのように。上棟式の時、槌音が響きわたり、皆同じ何かを感じ合っています。職人の、何かを、切り捨ててきたものの何かを再確認しているような…。



梁をくむ職藝学院学生 (学院パンフレットより)

黒川：そう、**伝統とは愛情なんです。伝統は時間の愛情、そして地域性は空間の愛情です。**地域の持つ力は人を創り芸を創り、それを喜びにしてきた。その地域に、誰かたった1人の情熱家がいるだけで場は変わる。高岡もそうあって欲しいですね。また、様々な分野の伝統技術もただの温存ではなく現代の社会にどう生かしていくかがこれからの大きな課題でしょう。ひとりひとりの苦悩や伝統と地域の重みが、富山の山から湾までの器に籠もっているように思います。

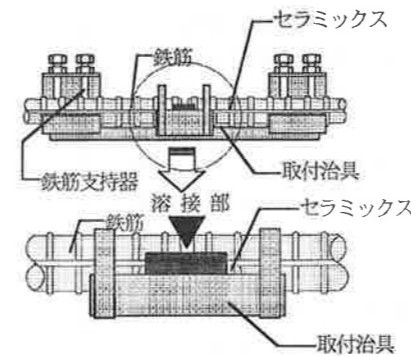
( '99.6.18.収録)

### ～鉄筋の溶接継手のご紹介～

私が8年間程、研究開発しておりました建設施工に使用する一つの方法についてみなさんに、ご紹介致します。

近年、建設現場において、RC(鉄筋コンクリート)建物の大型化や高層化に伴い、使用される材料も大型化や高強度化の傾向が見られるようになってきた。この状況の中、各ゼネコンも作業性の安全性の確保や工期短縮の観点から、建設現場工事の省人化・省力化を唱え、工場で製作された完成部材の据え付けやあらかじめ組み立てた鉄筋(総称してプレハブ工法と言う)を数多く使用されるようになってきました。このような部材を使用するにあたっては、接合により材料長さの変化がほとんどなく、経済性や作業性を考慮すると鉄筋の溶接接合が最も有効であると考えられます。

また、鉄筋溶接接合は各種あるものの、現場溶接品質を重視する方法として裏当て材にセラミックスを用いたCB(Ceramics Backing)工法が最も有効であると考えて、この方法を確立してまいりました。この工法の概要としては、接合しようとする鉄筋同士をU字形のセラミックスで囲い、その中に溶融金属を半自動アーク溶接機により、充填し、裏当て材にセラミックスを使用しているため、溶接終了後にセラミックスが除去できるのが最大の特徴であり、他の方法に比べて、(1)セラミックスが溶接後に取り外せるので、溶接部全体の目視で確認できる。(2)セラミックスの保温効果により、小入熱の溶接が可能で変形が少ない。(3)溶接後に取り外したセラミックスが割れなければ2～3回程度の転用ができる、等のメリットが挙げられます。



以上、述べてきましたように、私が研究開発してまいりました溶接品質が確保できるこの方法の現在までの施工実績は約100,000箇所あり、今後、この工法による施工実績の増加がすると思っております。

—佐藤工業株式会社 吉津 利洋

### 「我が家はポップハウス」



「主人の趣味は釣りとレコード鑑賞、私自身も楽器演奏が好きです。子供たちがまだ小さいのでやんちゃ盛りです。」

家を新築する時、図面作成の前に設計士から家族のライフスタイルを聞かれ、私はそう答えました。そして設計に2年をかけて完成した我が家は立体的な広がりのある空間が家の中心となりました。吹き抜けのあるオーディオルームを中心に、片

側は一段高いステージになっているミュージックルームともう一方は家族が寛ぐファミリールームという間取りです。オーディオは音楽が最もバランス良く聞こえるように配置し、ステージにはピアノを真中に子供達と一緒に演奏できるスペースを空けてあります。ファミリールームとは間仕切り戸があるだけで、開けてしまえば40畳ほどの広々とした空間となります。吹き抜けの天井は、子供部屋からすぐに見える配置で、家族がどの部屋にいても同じ空気を共有して一体感を味わえるようになっています。

この大空間で家族全員が参加して実に多くの催し物を行ってきました。親しい友人たちとのパーティーは勿論、ミニ・コンサート、ダンス大会、卓球大会、留学生との国際交流と、コミュニティーセンターのような場所になりました。お客様に訪れてもらうことが大好きな家族なので次々とイベントの計画が溢れ出ます。私は自分で音楽を奏でたり、人が演奏するのを聴いたりするのが好きです。訪れてくださった方々も一緒になって楽しむことができれば、それは素敵なことではないでしょうか。同時にこの家に集まってくださった方々との出会いは私達を外へと向かわしてくれました。家族音楽隊を結成し、家の中だけではなく外に飛び出して演奏活動を始めたのです。この家が人を招き、その人達にパワーを分けてもらい、もっともっと多くの方々と楽しさを共有したい気持ちにさせてくれたのです。

音楽隊の名称である「ポップコーンファミリー」は、隊員である子供達が余りにもやんちゃであることにちなんでつけました。元気に飛びまわって暴れる子供たちはまるでポップコーンのようだからです。この家があったからこそ子供達が元気に育ち、多くの素晴らしい人達に会えた訳です。するとこの家に名前をつけるならば「ポップハウス」とでも呼べるかもしれません。これからもポップハウスから大事な体験を発信させていこうと思っています。

—未来工房 吉谷 道江

### A modern building



(富山職業能力開発短期大学校・種田 隆子)

### 陰翳礼賛・あなたは、どんな『あかり』の楽しみ方を知っていますか？

夜間景観は、その街の個性を演出する非常に大切な要素といえます。まちづくりについて考え、行動する『福井アーバンデザイン研究会(FUD)』では、今年度の研究テーマとして「夜間景観」を取り上げました。

県都の顔ともいえる福井市中心市街地を舞台に“ふくいライティング・マスタープラン”を作成し、福井の夜間景観の向上と、夜も安全で快適な街づくりの実現を目指すと共に、夜間景観に対する意識を広く啓発したいと考えています。

そこで、実際に夜間景観を目で確認できるよう、あかりのイベント『ふくいあかり物語(仮称)』の開催を企画しました。都市のもう1つの表情を、きちんと楽しみたい。そんな単純な想いから、この企画は進められています。



谷崎潤一郎は、その著書『陰翳礼賛』の中で、暗さと共にある日本の美を、改めて私たちに気付かせてくれました。しかし、現代を生きる我々が、明るくという

ことの便利さを捨てることはできません。21世紀を目前に控えた今、その場に合った『あかりの姿』に配慮し、明るさ・暗さ、それぞれの美しさを、バランス良く兼ね備えた『新しい日本の光文化』を創出する必要があります。

都市の魅力はその多面性にあります。にぎやかな光、明るい光は相応の場所に。その周辺には、落ち着きのある光を配して、多面的な都市の表情を演出することが望まれます。街の個性を光で浮かびあげることができれば、それは素晴らしいことだと思います。

私たちの『ふくいあかり物語(仮称)』は、11月下旬、養浩館庭園をメイン会場に、福井市の中心市街地を回遊する形で行う予定です。蔭の美を楽しむ庭園、明るさを楽しむ商業地。それらをつなぐ、淡い光の線。

私たちなりの、陰翳礼賛?『あかり』の楽しみを御覧に、福井にお越しになりませんか？

—福井アーバンデザイン研究会 高木 紀榮  
問い合わせ先:n-tree@mitene.or.jp

### 信州の建築と風景



地方において建物を設計する場合、その地域の風土とか歴史というものに支配されながらその形態

や素材が決定されるものが多く、特に長野県はこのような傾向が強いように思う。全国的にみても未だに自県を「信州」という過去の固有名詞を使う人が多いのもその特徴の表れで、他の北陸5県と比較しても自分の出身地を越後とか越中と呼ぶ人はいないし、国立大学の名称に古来からの名称を使う県は全国的に見ても信州大と琉球大しかない。県歌があるのも長野県だけで、それだけに県民の風土や歴史に対する価値観の高さがうかがえる。先人の築いた文化を大切にすばらしい県民であり、これからの「地方の時代」を築くに相応しい独自性をもったお手本のような県かもしれない。しかし建物を設計するという創造行為の可能性の幅が縮小されてしまう危険性もあって、ある盆地の中でしか物事が考えられないような自覚症状のない自閉症に陥るケースも少なくない。安易な民芸調の建物やロマンチックな高原の山小屋風などが印象として残るのもその症状の表れである。地域の景観や文化を守ることは大切なことである。しかしそれだけに頼らずに地域性を見据えた新しい思考や観点がこれからの建築には求められるのではないだろうか。数年前完成した茅野市神長官守矢家史料館(藤森照信+内田祥士)はその可能性を大きく切り開いた今世紀における信州の現代建築の最高傑作である。その場所の風土や歴史に深く密着したような形態でありながら、突然、遠い異国の風景や過去の記憶に連れ戻されたような不思議な実在性のなさ、このような建築の在り方は、これからの信州の建築の方向性を示しているようではない。

—(株)宮本忠長建築設計事務所 松橋 寿明

### 新潟市民の伝統文化活動の拠点 『燕喜館』

新潟市白山公園内にある『燕喜館』は、明治から昭和にかけて活動した商家である旧斎藤邸の一部を移築再建したのである。平成6年に斎藤家から新潟市に寄贈されたこの建物は、新潟市民が日本の伝統文化活動(茶道・華道その他)を気軽に楽しめる公共施設として平成9年に完成した。

今年の7月31日、この『燕喜館』で「木造建築研究フォーラム」が開催された。再建に携わった地元の大工・左官・建具・屋根・造園等の職人さんから、工事を進めるにあたっての苦労や裏話を聞くことができたことは大変興味をそそった。

この建物が造られたのは明治期という日本の大工技術が最も円熟した時代であり、また、新潟が商売においても活況を呈していた時期でもあった。

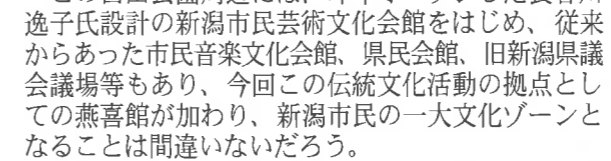
施主の斎藤家は、新潟の3大財閥の頂点にあった格式のある家であった。家普請は明治41年の新潟大火の直後からはじめられたということであるが、資材調達や大工・左官等の職人の調達にはほとんど制約がなく工事が行われた。

今回の移築工事に携わった地元新潟周辺の大工や左官等多くの職人さんの話から、「長年いろいろな仕事をやってきたが、この建築ほど材料の吟味や職人の素晴らしい仕事に触れたことがなかった」、「今までにやったことのなかったところは、京都の職人から教えてもらって完成した」と聞き、やはり素晴らしい建築であったと再認識した。

この建築の移築にあたっては、京都大学名誉教授・中村昌夫氏から従前の間取りや意匠を活かした前座敷や奥座敷、居室などに加えて、露地庭と一体となった本格的な茶室も新しく設けられ、私的な建物から公的な建物へと生まれ変わった。

この白山公園周辺には、昨年オープンした長谷川逸子氏設計の新潟市民芸術文化会館をはじめ、従来からあった市民音楽文化会館、県民会館、旧新潟県議会議場等もあり、今回この伝統文化活動の拠点としての燕喜館が加わり、新潟市民の一大文化ゾーンとなることは間違いないだろう。

—新潟県立高田工業高校教諭 広田敏郎



今年の夏はやたらと暑かった。おまけに秋まで暑かった。そのせいか酒米のできがやや気にかかる。昔と違い酒作りもほとんど機械化された蔵と、昔ながらの手法を基本に作る蔵とがある様である。いずれにしてもある程度の酒が仕込めるようだ。そこで問題なのが今では全国どこでもそこそこの酒が地酒として出回っていることである。まともな酒もあれば、まがいもの酒もある。戦後の物資が不足していた頃仕込んでいた酒とははるかに違う酒が現在の酒である。今から約20数年前に端麗辛口という酒が新潟で生まれ、今では全国どこへ行っても地元の吟醸酒が頂ける。(できれば昔風の熱燗はやめましょう。今の酒がかわいそうです)

ワインと違って日本酒は素人には利き分けしにくい(いいかえれば酒のプロが育ちにくい)部類だと思う。かなりの舌をもたないと違いが判りにくい。したがって日本酒には手を出しにくいのである。

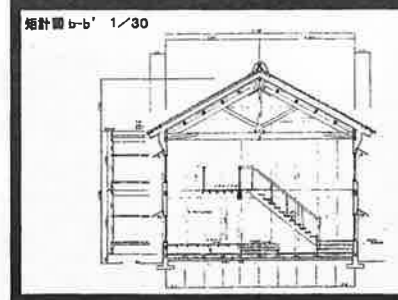
などと長々とどいてはいるが、おかげで飲兵衛には住み心地の良い世界でもある。何だかんだと能書きを言っているに飲めない酒が手に入ったりする。すると早速、飲みたくなるので、どこかで酒宴を開こうと言う事になり、同様に連絡を取り肴の美味しいところ(冬の新潟はアラカヤナギ、ヤリイカが良いと思う)で更けゆく夜を楽しむ。(もっとも店にとっては口開けから閉店までねばる迷惑な客だと思いが)勝手にいえば飲み始めは上越地方のやや軽い酒から仕上げは下越も北の辛い酒で締められるとなお良いのだが。

そんな飲み方をすると誘った相手がまた違う酒を持ってきてくれる。ありがたい事です。さあそろそろ鍋の美味しい季節の到来だ。誰か美味しい酒を飲ませてくれませんか？

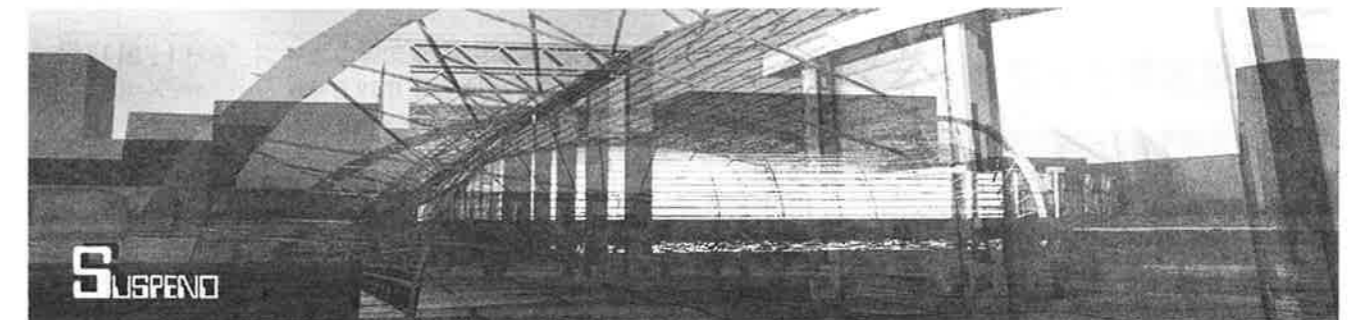
にいがた冬・食の陣 本間龍夫



筆者と飲兵衛が杯を酌み交わす所・新潟の情報発信基地“自由空間 蔵”



(信州大学大学院・北澤 秀吉)



(福井大学大学院・土井 健史)